

あちこちの田んぼにお米の赤ちゃんが植えられ、カエルの合唱が一段と大きくなりました。鏡のように輝いていた水田も、薄緑色のカーテンが掛けられたようで、新緑とフジの紫色の混在する里山との光景は、とても幸せな気分させてくれます。

この中を、子どもたちは、連日 ワラビやノビル掘りなどの散歩やハイキングに加え、スロープでの木登りや蔓登りなど、大地ならではの環境を満喫しています。同時に、子どもたちの口からは、わらべ歌がいつも聞こえてきて、絵本やおはなしもたっぷり楽しんでます。にじみ絵や裂き織も始まり、もう一人前の大地ライブを満喫している子どもたちです。

まもなく、ののはな祭りです。連日のご協力本当にありがとうございます。「人は仲がいいから、一緒にご飯を食べるのではなく、ご飯を一緒に食べるから仲が良くなる」という言葉が好きです。人が仲良くなり、理解しあえるには、机上での話し合いよりも、共に何かを作ったり、一緒に協力して作ったり、進んだり（登山など）することが一番であると考えています。製作したり、合唱したり、そんな中で、大地の仲間が豊かに深まっていく大きな機会になっていることを痛感しています。にじみ絵と同じように、その出来上がった作品よりも、その過程が重要であり楽しみである、そんなお祭りでありたいと願っています。ありがとうございます。



【飯前仕事】

朝、5 時前に、小さなミニバイク（モンキーと呼ばれるバイク）に 2 人乗りして、大地の駐車場のリンゴ畑までキャーキャー言いながら乗っていく。30 数年前に 2 人乗りでバイクに乗っていた時を彷彿させる。そして、リンゴの摘花作業を楽しんでいる。早朝作業の動機は不純である。今年 86 歳と 82 歳になる両親の作るリンゴは、お得意さんの間で、ここ数年「長寿のリンゴ」として人気を博しているが、さすがに年毎に、疲れてきているのは目に見えてきている。梯子の登り降りや長時間に及ぶ摘花作業（手先を使うので、ボケ防止にはなっていると思うが）は、大変だと思われる。週末ごとに、野球の応援やサイクリング登山などを楽しみたい、遊び人である私達は、それを横目に出かけるのは、とても後ろめたいし、忍びない。これを両立するために、考えたスタイルが、早朝摘花（通称、飯前仕事）である。

飯前仕事は、私は長年当たり前としてやってきたが、朝が苦手な妻としては、画期的な事である。子どものように、その結果、夜寝るのが早くなった。高校生の息子も、野球疲れで 10 時頃には眠ってしまうので、我が家は、まさに健全で省エネの家庭となっている。

朝 5 時と言っても今の時期は十分明るい。静けさと思いきや、隣のサンクゼールの外担当のスタッフの人はすでに、花壇などを連日整備しているし、近所の畑の人達も農作業に来ている。更に、小鳥やカラスたちが目覚めてくるのがわかるようになってきた。そして、小鳥たちのさえずりや会話がなんとなく理解できるし、その時間帯によりさえずる声が違うのもわかってきた。リンゴの木の高い所から見る景色、志賀高原や北信五岳、雲海ではなくリンゴの花と葉がそれのようになり、朝日とあいまり、美しい世界が広がっている。その中で、指先は、尽きることのない延々とあるリンゴの小さな身の一つ一つ採っていく事に集中している。私は、高所作業車の上で、妻は、下で作業を続けている。この中で、子どもの事、日常の事など、たわいもない事を話しながら進める。「こんな環境なら、どんな夫婦でも話をしなければならぬから、夫婦円満には最高のものかもしれない」と言うのと、「いや、現代なら、アイポッドやウォークマンを聞きながらやるかも知れないから、余計別々に会話もなくやることも考えられる」などと笑っている。

妻は「女性は、子どものうんちの匂いや子どもの匂いなどを本能的にかぎ分けられる感覚を持っている。こうした自然の中で本来暮らしていると、小鳥たちの会話や動植物の動き、星や時間の流れなどを本能的に理解できる感覚を持てるのが人間の本来の能力かも知れない。それが、現代ではそんな環境に暮らす事が少なくなってきているので、どんどんそれらの能力がなくなっていくのであろう」と話した。IT 社会が進めば進むほど、人間本来の本能的直感、感、第 6 感と言えものが、どんどん失われていくような気がするし、なんとなく直感で動く、思し召しやひらめきで動く、天の声で動く、自然からの声で動く等という人間の持つファンタジックな暮らしが、どんどんなくなっていくように思える。そうすると、皆同じようなスタイルで可もなく不可もなく中庸な暮らしになっていくだろう。

自然の中で暮らす、楽しむには、この人間的直観や思し召しというものがとても重要であるし、それが最高のキーワードだと思う。自然の中で、大変なことにぶち当たる、困窮する、困難に出会う、予期せぬことが起こる、そんな時、おもむろにスマートフォンを出して調べる、解決するのか、人間的体験に基づく本能と直感で見極めて動くのか、生命の危機（遭難等）は別として、後者の方が、私はかっこいいと思うし、子どもたちにも、こんな姿を見せたいと感じているし、子どもたちもそれが素敵だと思う人間になってほしいと願う。（パソコンや携帯や IT 機器をスマートに自由自在に操る姿がかっこいいというイメージがコマーシャルやポスターで氾濫している世の中だが）

我が家の長男も長女も次男も山小屋で暮らしてきた。そこでは、携帯電話や IT はほとんど使えない暮らしであったようだ。携帯の電波が届く所まで、かなり歩かねばならない環境であったので、自然に疎くなったらしい。もちろん思春期は、携帯の魅力に取りつかれていたが（今、末っ子はその盛りだが）、今は、それ以上に自然や他の魅力に取りつかれており、それに依存するエネルギーはなくなった。その意味では、IT から切り離された山岳での暮らしは、とても人間的に魅力的である。そう言えば、長男も長女も山小屋へ行ったあたりから、文章表現や会話がとても変わり、魅力的になったことを思い出す。山では、人や星や山々と会話するしかないのであろう。現代のような IT 社会においては、幼少期からその環境を受けざるを得ない世の中であるが、それだけにどこかで、意図的にその世界から切り離す暮らしをしてみるのも大切かも知れない。テレビをやめると、更に違う魅力的な世界や暮らしがあるとわかるように。その意味で、4 月から山小屋へ行っている次男の成長を楽しみにしている。

と言っても、6 月 8 日から、単独でいよいよマッキンリーに挑戦する長男。本人は、きらめきときめき、最高のモチベーションを維持しているらしい。80 歳でエベレストに登頂した三浦雄一郎。長野県の IT 気象予報士が科学的根拠による天候予報で全面的にバックアップしたことが新聞に載っていたが。親としては、文明の機器を、科学を用いて安全に登ってほしいと願うところだが、本人は どちらかと言うと、シンプル、無酸素 単独登山を常に目指している。

親としては、これらの自己矛盾と闘いながら、ひたすら子どもたちの安全を願う毎日が続く。